

第2章 銃後

札幌空襲④

敵の飛行機が屋根すれすれを飛んでゆく！

吉田益子さんのお話から

私は琴似を開拓した屯田兵の子孫として、現在も住んでいる発寒の地に昭和六年に生まれました。当時は祖母や両親らと五人で暮らしていました。

戦争が始まった当初は、日本が戦争をしているという実感もなく、平穏な生活を送っていましたが、いつしか兵隊として出征する若者の母親が「千人針」のお願いに近所の家を回るようになっていました。「千人針」とは、白い豆しぼりの手拭いに、若い女性が心を込めて年の数だけ赤い糸で糸玉を作って縫い、兵隊へ行く人の安全などを願って持たせた物です。

出征する時は古いも若きも皆、琴似神社に集まって無事を祈願した後、琴似駅まで見送りに行き、日の丸の小旗を振りながら「勝ってくるぞと勇ましく」。と声高らかに歌いながら見送りました。

若者が次々と出征していくため、農家の働き手がいなくなり、学校に通う子どもたちも勉強を休んで農家の農作業を手伝う援農に行くようになりました。今の高校生の年頃ともなると、空知方面の農家へ長期間援農に行き、夜はお寺などに泊まりながら農作業を手伝いました。親や友だちに会えない寂しさと、慣れない農作業に疲れ果て、涙ながらに手紙を書いた方もいたそうです。私は体が小さかったため、援農ではなく、市内の軍需工場で軍服のボタン付けや洗濯などを手伝いました。

だんだん戦争が激しくなるにつれて、お米や食料、生活に必要な物資はすべて配給制になりました。配給切符が発行され、その切符が無ければ物を買えないのです。だから皆、畑にカボ

○供出 国などの要請によつて物資を差し出すこと。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくつた穴や地下室。

チャやジャガイモなどを植えて自給自足していました。私の家は農家で米や雑穀を作っていました。家族が食べる分以上はすべて供出させられました。それでも他の家に比べると、食糧事情は良かった方だと思います。靴などもすべて配給のため、足のサイズに合わない靴でも我慢して履いていました。

そのうちに空襲警報が頻繁に発令されるようになってきました。学校でも空襲に備えて竹槍やなぎなたの稽古、消火のためのバケツリレーの訓練などもやりました。空襲警報が発令されると、サイレンと釣鐘を叩く鐘の音が町中に鳴り響き、至る所に作っていた防空壕に逃げ込みました。夜は空襲の標的とならないように、明かりが外に漏れないようランプを黒い布のような物で覆いました。着替えなどはすぐに持

敵の飛行機が屋根すれすれを飛んでゆく！



イメージ図

空襲警報で防空壕に逃げ込む様子

ち出せるよう、枕元まくらもとにたたんで置いて寝たねものです。

空襲では、今も忘れられない出来事がありました。

終戦間近の昭和二十年（一九四五年）、学校が夏休みだったある日の昼間に空襲警報が発令されました。父は市役所勤務きんむだったため、警報が出ると足にゲートルという布ぬのを巻いて急いで出勤しゅっしんしなければなりませんでした。その日、母は農作業中だったのか、家には私と祖母そぼしかいませんでした。すると間もなく、モスグリーンの機体に星のマークを付けたアメリカの飛行機が、自宅じたくの屋根すれすれを飛んでいくのが見えました。私は慌あわてて祖母そぼを連れて防空壕ぼうくうごうへ逃げようとしたのですが、祖母そぼは「私はもうじき土の中へ入るのだから、防空壕ぼうくうごうには入らない。」と言いました。仕方なく、家から掛かけ



屋根の上を飛ぶ飛行機

イメージ図

敵の飛行機が屋根すれすれを飛んでゆく！

布団を持ち出して二人で頭から被り、自宅前の大きな松の木の下に隠れました。木の陰から恐る恐る飛行機の飛んで行った方向を見ると、今の手稲駅（当時は軽川駅）近くの石油工場が爆撃されているのが見えました。真っ赤な炎や黒煙が立ち上り、爆風で石油のドラム缶が軽々と空に舞い上がっているのを目の当たりにしました。

その後間もなく、八月十五日にラジオから天皇陛下の声で戦争の終わりを告げられ、終戦を迎えました。老いも若きも皆、涙を流して悲しみました。

終戦後は、アメリカの兵隊が次々とやってきました。琴似でも「MP」と書かれたヘルメットを被ったアメリカ兵がジープに乗って街の中を走っていて、親からは「目を合わせてはダメ、派手な服装をしてはダメ。」などと言われ、とても怖かったのを覚えています。

今になって思い返すと、現在の平和というのはとても貴重なもので、あんな恐ろしい戦争は二度と起こしてはならないと強く思います。

DATA

平成22年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成22年7月26日
- ・吉田氏ご自宅



吉田益子(よしだ・ますこ)さん

- ・昭和6年(1931年)生まれ
- ・札幌市西区在住